
ナルトとヒナタの恋物語

kamo(ra)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナルトとヒナタの恋物語

【Nコード】

N1609W

【作者名】

kamo(r)

【あらすじ】

原作とはちよつとちがうナルトの世界…。うちはマダラは存在せず、サスケは大蛇丸とイタチを殺して里に戻り、抜け忍の罪で投獄された。ナルトは仙術を身につけペインを倒し、その時点で暁は消滅した。里は徐々に復興し、平和な時間が訪れつつある、そんな世界。

サスケとサクラの恋愛を悔しいと思わなくなっていたことに疑問を持ちつつ、ナルトは何故か別の女性…ヒナタが気になっていた…。そんなナルヒナな物語。恋愛あり、戦闘ありの「ちよつと違う」忍

第1話「鈍感ナルトともじもじヒナタ」

俺の名前はうずまきナルト。

木の葉隠れっていう忍びの里で火影を目指して日々頑張ってる天才忍者だってばよ。

最近仙術つてのを身につけたり、大蛇丸と兄を殺して里に戻ってきたサスケが抜け忍の咎で投獄されたり、ペインつて奴が俺の師匠を殺したり、そいつと戦って里が半壊したりと色々あったけど、里の復興も始まり、今は落ち着いてまあ平和になってる。

そんな俺の物語だってばよ！

「今日もサクラちゃんはサスケのところかー。俺ってばどーすっかなー……」

サスケは抜け忍として里の牢に入れられている。しかし、俺や皆の嘆願のおかげか綱手のばあちゃんも懲役3年という異例の甘んじ分にしてくれた。

それ以来、サクラちゃんは毎日サスケのところへ面会に行っている。

「寂しそうですね、ナルト。」

「おわあ！サイ！急に現れるんじゃないよー！」

突如横に現れたのは俺の仲間のサイ。

「サクラがサスケにとられて、悔しいんだろう？」

「んー……。それがさあ、あんまし悔しくねーんだってばよ。」

「へえ、どうしてだい？」

「わかんねー。俺ってばサクラちゃんのこと大好きだった筈なんだけど、サスケのところに毎日通うサクラちゃんを見ても、頑張れよって気持ちしかおきねーんだよ。」

「そうか…それは興味深い。本にそんな症状、書いてあるかな。」

そう言うと、サイは自分の荷物の中から本を1冊取り出した。表紙には「男と女、心の移り変わり」と書いてある。

「んなもんで人の心が解ったら、苦労しねーってばよ…。」
「そうかな？」

サイはそのまま歩いていつてしまった。

一樂でラーメンを食べ、金を払って店を出ると、向こう側にヒナタが居るのが見えた。

横にはキバが居る。楽しそうに笑いながら話をする二人を見て、俺はちよっぴり胸がズキンとした。

(…?なんなんだってばよ…。)

「おい、キバー。ヒナター。」

声をかけ、歩み寄る俺。

「おうナルト。里を救った英雄様のお出ましたな。」

「な、ナルト君…。」

ニヤニヤするキバと、もじもじするヒナタ。

「よ、ヒナタ。ん?どうした?顔が赤いってばよ。」

まるで茹蛸のように顔が赤いヒナタ。熱でも…?

「熱でもあるのか…?」

そう言つて額に手を当てる俺。すると…。

「ご、ご、ご、ごめんなさいナルト君!」

なぜか慌てて走り去ってしまうヒナタ…。

「なんだってばよ…。」

「ナルト、お前、ヒナタに『好きだ』って言われたんだろ。」

「私はナルト君が好きだから。」

ペインとの戦闘中、ヒナタは確かにそう言った。もっとも直接言わ

れた訳じゃない。ペインにそう言うヒナタの背中を、俺は見ていた。その言葉に、俺は少し舞い上がり…直後、やられたヒナタを目にして九尾化してしまったのだが。

「ま、そういうことになっかな。」

「で。お前はどうかだよ、お前は。」

「ん？俺もヒナタのことは大好きだってばよ。」

「おお！」

「もちろん、キバも、ゲジマユも、ネジも、テンテンも、シカマルも、チョウジも、いのも、サクラちゃんも、サイも、それにサスケもな。」

「…そういう意味かよ。」

「？他にどういう意味があるんだ？」

「いや、いい…。」

キバはよく分からないことを言う。

それよりヒナタだ。あいつ大丈夫なのか？

そういえば、俺はキバと話しているようなあいつの笑顔をあんなに見たことがない。

俺と話するときはいつももじもじしてて、すぐ赤くなって逃げちまう。そっか。だからキバが少し羨ましくて、胸が痛んだんだな。

「おい、ところで、お前：誰か1人忘れてないか？」

「え？」

「ナルト、ヒナタ。お前達2人に任務を言い渡す。」

次の日、俺とヒナタは綱手のばあちゃんに呼び出され、任務を言い

渡された。

「本当はナルトとサクラでも良かったんだが、ペインに傷つけられたものは多く（死んだ者は蘇ったが）、医療忍者の手が足りていない状況だからな…。」

「わかったってばよ！んで？どんな任務だ？」

「火の国から忍びの足で5日ほど南下した海辺に最近「色の里」という小さな里が出来たのだが…。そこを訪れる男女の旅人が相次いで行方不明になっているのだ。調査に何組か派遣したがまったくわからずじまいでな。おとり捜査のようで癪だが、男女組で旅人を装って調査した方が良いと判断し、お前達を呼んだんだ。」

「なるほどなるほど。よーっし！このうずまきナルト様が、そんな謎、直に明らかにしてやるってばよ！よろしくな！ヒナタ！」

「よ、よ、よ、よろしくね、ナルト君…。」

まーた顔が赤くなってる…。大丈夫か？

支度をし、俺たちは旅立った。

「…で？被害にあってるのは、どういうやつらなんだ？」

「う、うん。若いカップルとか、夫婦が多いみたいだね。」

「そっか。じゃあ、おとりである俺たちもそれを装ったほうが良いな。」

「え、え？」

「ヒナタ！俺たちは今から、夫婦だ！」

「え、えー！！！！！」

顔を真っ赤にして倒れそうになるヒナタ。

何やってるんだ？

「で、でも、そ、そ、そ、それはまだ早いつていうか、その…。」

「ん？そっか。そんな年齢でもないしな。じゃあ、恋人同士ってことで行くってばよ。」

「こ、こ、こ、恋人…。」
顔を真っ赤にして倒れるヒナタ。
本当に何をやってるんだってばよ…。

5日後、色の里に入る俺たち。

「あ、あ…。やっと、町に入ったってばよ、なー、あ、愛する、ヒナタちゃん？」

うん。我ながら完璧な演技だつてばよ。

「そ、そうだね、やっと休めるね、あ、あ、愛す…愛する…。」
どもるヒナタに小声で突っ込む俺。

(ちゃんと言わないと、怪しまれるってばよ！)

(で、でもナルト君…。本当のカップルって、こんな会話するのかな…?)

(わかんね。)

(ちょ、ちよっとナルト君…。)

(でも、こういう方法しかアピールの仕方が思いつかねーってばよ。さ、ヒナタ。)

(う、うん…。)

「は、早く宿に入ろう、あ、愛するナルト君…。」

うーん、俺と比べたらわざとらしい演技だが…ま、いっかってば…お？

そうこうしていると、見るからに怪しい老婆が近づいてきた。

「なんだ？婆さん。」

「ふえっふえっふえ…。お前さんら、見たところお似合いのカップルのようにじゃが…。」

お！早速引つかかったか！？

「おう！俺たちラブラブもラブラブなカップルだつてばよ！なっはっは…！」

「ふえっふえっふえ…。そうかそうか。なら、是非うちに泊まりなされ…。うちの温泉はカップルの仲がより深まるという伝説があるのじゃ。」

「おっ！じゃあ、そうさせてもらうってばよー！」

「ふえっふえっふえ…。こっちじゃ…」

老婆はそう言つと俺たちの前を歩き出した。

(な？ヒナタ。上手くいったる？)

(…うん…。よくあれで上手くいったよね…。)

?どつという意味だつてばよ。

まあいいや。

俺たちは老婆の案内に従つてちよつと鄙びた、風情のある温泉宿に泊まることにした。

「宿そのものに怪しいところは無し…か。」

「な、ナルト君。従業員もいたつて普通に見えるけど…。」

「つてことは…怪しいのは温泉だな。とりあえず行つてみるつてば

よ。」

俺たちは温泉に向かう。するとそこは…。

「おお！？混浴!?!」

「う、嘘…。」

「…ま、恥ずかしがつててもしょうがねーし、入つてみつか、ヒナタ。」

「え、え、え、えー!!!」

そして数分後…。

俺は体を洗い、湯船に浸かっていた。

「ヒナタ…遅いつてばよ。仲間なんだから、なにもそんなに恥ずかしがらなくても…。」

しかし、さらに10分たつてもヒナタは入つてこない。

「…何かあつたのか!?!」

俺が心配になって立ち上がったその時…。
ガラスと女側の更衣室の扉が開き、ヒナタがバスタオルを巻いて入ってきた。

おもわずポーっと見とれる俺。

「ヒナタ…こうしてみると結構色っぽいってばよ！胸もでかいしな！綱手の婆ちゃんにも負けてねーぜ。」

「も、もう…ナルト君ったら…。」

…ん？あれ？今の会話の方が自然なバカッブルっぽくね？
とにかくヒナタも温泉に浸かる。

「ふー…けっこう良いお湯だね、ナルト君。」

「おう。もしかしたら怪しいってのは勘違いだったのかもな！」
素晴らしいがらしばらくゆったりする俺たち。

と、ヒナタの顔つきが急に険しくなる。

「ナ、ナルト君…！この温泉、なにかおかしい…！」

「ど、どうしたってばよ！」

「チャクラが…温泉のお湯にチャクラが吸い取られているみたい！」

「な！なんだって！じゃあ早く出るってばよ！」

俺は温泉から出ようとした…しかし！

「な、なんだ！体がお湯から離れないってばよ！」

「ナ、ナルト君…私…もう…。」

ヒナタはすでに限界が近そうだ！

そこにあの老婆が現れた。

「ふえっふえっふえ…。チャクラという言葉を知っているとは…さてはお前達、忍びじゃな？」

「婆さん！これはどういうことだってばよ！」

「ほう、お前さんは元気じゃな…。よほど大量のチャクラを有しているを見た。まあいい、教えてやろう。この温泉は実はとあるお方が口寄せした生物なのじゃ。」

「なに！これ、生きてんのかあ！」

「一度浸かった者を逃がさぬ水牢の力と、その者のチャクラを吸収

する力を持つておる。」

「一体何のために…。」

「我々はあるお方の為にチャクラを集めておるのだ…。それも愛し合う二人の純粋なチャクラをな…。チャクラは誰にでも宿つておるから、一般の者でも十分効果的であつたが、忍びのチャクラとなればその量は測り知れん。さあ、解つたらおとなしくチャクラを全て吸収されるがいい！安心しろ、干からびた後はちゃんんと墓を作つて埋めてやるわい！」

愛し合う二人の純粋なチャクラ、というのは引つ掛かる…チャクラつてみんな同じなんじゃねーか？

だが、話はわかつた。

今まで行方不明になつたカップルや夫婦は、チャクラを吸い尽くされて殺されてしまつたのか…。

しかし、チャクラの総量が多い俺はともかく、ヒナタは限界だ。

早く何とかしねーと…。

「ヒナタ、ヒナタ。この温泉が生物だつてんなら、どっかに弱点とかねーのか！？白眼で見極められないか！？」

「う…うん…。やつてみる…！」

そう言つと、ヒナタは力を振り絞つて白眼を発動した！

「…！ナルト君！私の指差すところを狙つて！そこにこの生物のチャクラが集中してる…！」

「よし！解つた！」

そう言つと俺は螺旋丸を放つた！

「うおおおおお！螺旋丸！」

！

温泉のお湯にしか見えないが、確かな手ごたえを感じる！

そして次の瞬間…！

パァン！

大きな音と共に温泉が吹っ飛んだ！

「な、なに…！まさか…！温泉くらげがやられるとは…！」

そう言っていると、婆さんは逃げ出してしまった。

「ま、待て！くそっ！追うぞヒナタ！」

そう言っていると、俺は振り返った。

「待って！見ないで！ナルト君…！」

そこにはさっきの勢いでバスタオルも吹っ飛ばされてしまったヒナタの姿が…！

刹那、俺は鼻血を吹いて盛大に倒れてしまった。

薄れ行く意識の中で、俺は思った。

(な…なんで水着とか…着てねーんだってば…よ…。)

「よくやった、ナルト、ヒナタ。お前達のおかげで事件は明らかになった。逃げた老婆や事件に関わっていた村人は全て、潜んでいた他の忍びが捕らえたから安心しろ。なに、チャクラを吸収されていたんだ。お前たちが捕らえ損なったのは別に問題じゃない。」

綱手の婆ちゃんはそう言っていると豪快に笑った。俺は引きつった笑いをする。ヒナタはというと、相変わらずもじもじしている。

「しかし、ヒナタ。災難だったな。こんな奴に、その、なんだ、見られてしまうとは…。」

「い、いえ…ナルト君なら、べ、別に…。」

「そうか？…ほー、そうかそうか。」

婆ちゃんは何故かニヤニヤし始めた。

俺はそれを無視して質問する。

「それで…奴らが言っていたあるお方ってのは、誰のことだったんだってばよ？」

「うむ。その事なんだが、正直さっぱり解らん。尋問部隊もてこずっているようだ。」

綱手の婆ちゃんは真面目な顔になってこう言った。

「ただ…『修羅忍』というキーワードだけは明らかになった。今後

その言葉の謎を調査していかなければならんな。」

「ヒナタ。今回は助かったぜ。サンキューだつてばよ。」

「う、うん……。」

「また任務が一緒になったら、よろしくな！」

「うん！」

そう言うと、ヒナタは少し笑った。

うーん…あの笑顔まではもうちょいかなあ…なんかまだ顔が赤いし。
…。

ま、いつか。

第1話「鈍感ナルトともじもじヒナタ」（後書き）

ちよつとやってみたかったナルヒナの物語。

設定等はなるべく原作に近くしつつ、まったくちがったパラレルワールドの物語を展開していきたいです。

更新は不定期になると思いますが、よろしくです。

ナルト「砂組は最初から数に入ってたから…あ、アイツだ！」
ヒナタ「ひ、ひどいよ、ナルト君…。」

第2話「鈍々ナルトと妹的ヒナタ」

「本気でかかって来い！ナルト！」

「へっ！じゃあ遠慮なく行くつてばよ！多重影分身の術！」

…。

オレの名前は日向ネジ。

木の葉隠れの里でも白眼という血継限界を持つ一族に生まれ、天才と呼ばれて育ってきた。

分家の生まれで、そのいざこざの中父を失ったことを根にもち、本家を恨んで育ち、運命は変えられないと絶望していたオレを救い出してくれたのがナルトだった。

あの頃はオレと良い勝負だったこいつも成長したもんだ。

「八卦掌回天！」

影分身の突撃を全ていなし、一緒に空中に吹っ飛んだ本体を見つけたオレはジャンプして突っ込んだ。

「そこだ！絶招・八門崩撃！」

「へ！そう簡単に行くか！」

当たる！と思つた瞬間、ナルトはすかさず自分の後ろに影分身を作り出し、そいつに支えさせることで空中で無理やり体勢を立て直した。

「しまった！」

「喰らえ！螺旋丸！」

「…また負けたな。」

「いやあ、ネジはやっぱ強いってばよ。」

「すまなかつたな。修行に付き合ってもらつて。」

「なーに。俺も色んな奴と組み手して、もっともっと強くなりてーからな。」

…。
ナルトは本当に強くなった。真つ直ぐな戦闘方法は変わらないため、からめ手で攻めて来るような相手にはやや弱い、それでも今の木の葉では最強だろう。

火影である綱手様やカカシ、ガイといった上層部でも最早敵わないかもしれない。

「それ以上強くなってどうするんだ？」

「ん？ああ。火影になるんなら、里をぜってー守り抜く力がないとならねーからな。」

火影になる、か。

今のお前ならあながち夢とは言えまい。

と、そこへ…。

「な、ナルト君、ネジ兄さん、お茶が入りました。」

ヒナタがお茶をもつてやってきた。

ヒナタはオレの従兄妹で、本家の血を引く忍だ。

昔、運命を呪っていたオレは彼女が憎くて堪らなかった。

ナルトに救われてからはわだかまりは解けていた。

その後、ヒナタ様と呼んでいたオレは彼女にこう言われた。

「ね、ネジ兄さん。様、なんてやめてよ…。私は年下だし、忍としての年季も実力も兄さんの方が上なんだし…。」

「しかし、ヒナタ様は本家、私は分家の人間なので…。」

「ま、またそう言うこと…。ナルト君にくだらないうって言われたでしょう？」

「ええ。ですから、もうわだかまりはありません。でも。」
「私は…私は兄さんのこと、本当に兄妹みたいに思ってた…。だから、他人行儀なのはやめて？」

それ以来、オレは彼女をヒナタと呼んでいた。

「あつちい！ヒナタ、このお茶熱いってばよ！」

「ご、ごめん、ナルト君…。ネジ兄さんがいつも熱い方が好きだつて…。」

「ナルト、お前猫舌じゃないのか？」

「いやいや、普通に熱すぎだろ、これ…。」

…そうか？リーが来た時は普通に飲んでたが…。

「ヒナタ！俺も時々ここに修行に来るからよ、俺の好みも覚えて欲しいってばよ。」

明るく言うナルト。

こいつにその気が無いのは解っているが、自分を好きな女の前で『俺の好みを覚えろ』とは…。

2、3歩間違えればプロポーズだぞ。

真っ赤になって

「う、うん、覚えるね。」

と言うヒナタ。

可愛い。無論、妹として、だが。

オレはヒナタには幸せになってもらいたい。その相手がナルトなら、オレは反対しない。

こいつほど良い奴はそうは居ない。

そう思いながら、オレは茶をすすった。…やはり丁度良い温度だ。

「じゃあ、ネジ兄さん。私、先に…。」

「ああ。俺はまだ、ナルトと話があるからな。」

ヒナタはそう言うと立ち上がった。風呂に入る気だろう。

「どうしたってば、ヒナタ…。」

「ナルト。」

ヒナタに声を掛けかけたナルトを遮り、俺は真面目な顔で話しかけた。

「な、なんだってばよ。急に真面目な顔して…。」

俺はこっそり白眼でヒナタがすでに俺たちの声が聞こえないくらい離れたことを確認してからナルトに問いかけた。

「お前、ヒナタのことどう思ってる？」

「へ？どうって…。」

「言葉通りの意味だ。」

「うーん…。大事な仲間、だってばよ。」

「それだけか？」

「それ以外にどう…あ、いや…。」

「何かあるのか？」

「なんか最近、妙に気になることがある。」

「気になる？」

「ああ。ヒナタのやつ、キバやシノや…他の奴と話してる時は楽しそうな笑顔なくせに、俺と話してる時はそんな笑顔にならねーんだ。」

「笑顔…。」

「なーんかいつつももじもじしててよ。まともに眼もあわさねーし

…。俺ってばなんか避けられてんのかな。」

「いや、それはだな…。」

「俺だって、笑顔のアイツと話してーってばよ。」

！！！

これは…。脈が無いわけじゃないな。

ナルト自身まったく自分の心を理解していないようだが…。

しかし、先は長そうだ。

「ヒナタ…苦勞するな。」

「なんだってばよ…。」

「…それよりナルト。汗かいただろ。」

「ああ、べたべただってばよ。」

「なんなら、風呂に入っていけ。日向本家の風呂はでかくて気持ち良いぞ。」

「ほんとか！？いいの？」

「ああ。今すぐ入って来い。着替えはオレが用意してやる。」

「おお！サンキュー、ネジ！」

そう言つと、ナルトは走つていった。

ふう…。

一息入れるオレ。

少しすると…。

「キヤーっ！！！！な、ナルト君…！！」

「わ、わわ、すまねーってば…！！」

慌てる二人の声がした。

うんうん。この位しないと二人の仲はまったく展開すまい。

我ながら優しい兄だ。

…。

「ね、ね、ね、ネジ！ヒナタが居たってばよ！」

「そうか。それは気付かなかった。」

あくまでしらを切るオレ。

しばらくして、ヒナタが風呂から出たのを確認し、ナルトは風呂に浸かった。

オレが縁側でなおも寛いでいると、ヒナタがやってくる。

「…ネジ兄さん。私がいるのを知つててナルト君を…。」

「なんだ。気付いてたか。そのくらい刺激が無いと、いつまでたっ

ても進展しないだろ。それとも、覗いたナルトに腹がたってるのか？」

「わ、私は…。別に…むしろ…ごにょごにょ。」

「ふっ。ナルトには、日向を変えてもらう約束だからな。オレ自身はわだかまりも無くなり、ヒアシ様にも修行を見てもらっているが、まだ本家と分家の溝は消えたわけじゃない。」

「兄さん…。」

その頃、風呂では…。

「はあ…。またやっちゃまったってばよ…。ヒナタは前に俺のこと好きって言うてたけど、あんなことしちゃったら、嫌われるよな…。」

「そう呟くと天を仰ぐ。」

「でも…。ヒナタの胸、でかかったな…。柔らかそうだった…。つて！何考えてんだ俺ってば！」

時は数刻遡る。

「だめ！シカマル！あいつ、動きが速過ぎて…！」

「いの！心転身は諦める！捕らえ損なったらこっちが不利になる！」なんて素早さだ。以前に見たナルトの仙術状態と同等か、もしかしたらそれ以上に速い。

「僕が止める！」

「チヨウジ！」

「おおおおお！肉弾戦車！！！」

当たる…！超倍化の術で巨大化したチヨウジの攻撃はいくらあいつがすばしっこくても避けきれない…！

俺はそう思った。

だが、やつは振り返り、印を結んだ…！

「チヨウジ！危ないぞ！あの技が来る！」

俺は叫んだが、チヨウジは止まれない。やつはにやりと笑い、術を発動した…！

「風遁、風雲弧憎！」

鋭い風の刃がチヨウジを襲う！

「ぐわあ！」

体から血を噴き、倒れるチヨウジ。どうやら腹に命中したようだ。

それを見て足を止めるやつ。舐めやがって…！

「くそっ！」

「や、やだ！チヨウジ、しっかりして！」

俺といのが駆け寄る。かなりの怪我だが、命中したのが腹だったためか、脂肪のおかげで大事には至っていないようだ。

いのが即座に医療忍術で回復を図る。

俺はチヨウジを心配しつつも気取られないようにやつを捕らえようと影を伸ばしていたが…。

「おっと。」

そう言つと、やつは後一步のところまで距離をとった。

「…どうやら、俺の術のことを知っているようだな。」

「ああ、もちろん。君の術だけでなく、秋道一族の秘伝や山中一族の術もよく知ってるよ。」

「…お前、何者だ？何故その巻物を狙う？」
巻物。

今回の俺たちの任務はその巻物の護衛だった。

しかし、探知要員に連れていたキバはあっさりあの術でやつにやら

れてしまい、追っていた俺たちもこの有様だ。

任務失敗か。

「その巻物、何が書かれているのか知っているのか？」

「じゃなきゃ奪うかよ。」

…。

俺たちにはそれがなんの巻物かは知らされていなかった。

なにかの秘術を記したものらしいとは聞いていたが…。

「じゃあな。またいずれ会おう。…俺の名は乱丸。修羅忍が一人、

『法善意 乱丸』だ…！」

そういつてやつは消えた。

「修羅忍…だと…！？」

俺はやつが消えた地点をいつまでも睨んでいた…。

第2話「鈍々ナルトと妹的ヒナタ」(後書き)

オリキャラ登場！今後も増えていきます。少なくとも、11人…出せるかなあ？

ナルト「そっいや、ネジ。白眼でヒナタとか、他の女の子が風呂に入るのを覗いたことってねーの？」

ネジ「ナルト…。本気で怒るぞ…！？(八卦の構えをとる)」

ヒナタ(わ、私はナルト君を一回だけ…。)

第3話「失敗ナルトと母性ヒナタ」

「大分復興してきたな。木の葉の里も。」

私の名前はテマリ。砂隠れの里の上忍だ。

今日は木の葉の復興を支援するための物資の輸送がてら、ある男の様子を見に来たのだ。

「…よう。」

仏頂面で現れた男。奈良シカマル。こいつをだ。

「なんだその顔は。同盟国の忍が支援物資を持ってきてやったんだ。もつとありがたそうにしゃがれ。」

「うっせーな、めんどくせー…。上忍のお前の仕事じゃねーだろ。」

「私は何故か木の葉と仲良しと思われてるみたいでな。」

「ちっ…。」

シカマルはすこぶる機嫌が悪い。

理由はわかってる。つい最近任務を失敗したそうだ。

死者こそ出しはしなかったが、守るべき巻物を奪われ、仲間は大怪我させたらしい。

「まったく。なに腑抜けた顔してんのさ。」

「っせーな…。めんどくせーからさっさと仕事して帰れよ。」

「聞いたぞ。任務失敗したんだって？ぶっ。だっせー。」

「な…なに！誰に聞いた！？」

「こないだ我愛羅のところにうずまきナルトが来てな。しばらく談笑してたんだが…。」

『そっぴや、我愛羅。修羅忍って聞いたことねーか？』

『修羅忍…？いや、すまないが初耳だ。その忍がどうかしたのか。』

『最近解決した事件の裏にその修羅忍が暗躍していたらしくてな。』
『ほう…。』
『しかも、シカマル達がそいつらにやられてよ。チヨウジやキバは大怪我するわ、巻物死守の任務は失敗するわ…。』
『あの奈良シカマルが失敗するとは、よほどの奴なのだな。』
『だと思っつてばよ。あ、ところで、テマリにはこのこと言っつなよ？なんかわかんねーけどシカマルに口止めされてんだ。』
『わかった。』

「…と、言う訳だ。ちなみに私は我愛羅から聞いたわけではなく、その話を聞いたカンクロウから聞いた。」

「…にやるう…。」

ますますむくれるシカマル。

「ま、いいじゃんか。失敗の1つや2つ。なんだったら、お姉さんが慰めてやるうか？」

胸をよせる仕種をしてからかう。

「バーカ。誰がてめーなんかに…。」

あ、ちよつとカチンときた。

私はそっぽを向いたシカマルに近づき、顔を掴んで私の胸に押し込んでやった。

「どーだ！嬉しいか!？」

「わ。ば、馬鹿、や、え、止め…。」

もがくシカマル。だが残念。純粹な力勝負なら私のほうが上だ。やがて静かになるシカマル。

「お、どうした？少しは元氣出たか？」

その言葉に、シカマルは顔をあげずに答えた。

「…ああ。なんか落ち着いたわ。ありがとな。テマリ。」

手のひらを返したかのような真っ直ぐな礼に、私のほづがこっぴどくかしくなる。

「ばーか。さっさと離れる。」

「…。」

「…シカマル？」

「…離れたくねーって言ったら、どうする？」

…思わず。

からかってたはずの私の方が赤くなってしまった。

「あ、あの…。」

突然後ろから話しかけられてびっくりする。シカマルも慌てて私の胸から顔を離す。

後ろにいたのは…確か…。

「ヒナタ…！お前、どっから見てた!？」

そうそう。日向ヒナタ。

「え、あの…。『なんだったら、お姉さんが慰めてやるっか?』から…。」

結構前じゃないか…。

「で?なんの用だい?まさか、私とシカマルの情事を覗きに来た訳じゃないんだろ?」

なるべく余裕ぶって、お姉さんぶって、私は尋ねた。

「あ、あの、支援物資の運搬のお手伝いに…。」

「そうか。じゃあ、あっちのを頼むよ。ほら、シカマル。あんたはあっちのでかいやつだ。」

「へいへい。めんどくせー…。」

ぶつぶつ言いながらも重い荷物を運ぶシカマル。

「あ、あの…。」

「?どうした?...ああ、さっきのことなら、出来ればナイショに...」

「さ、さっきの...私でも出来ますか?」

へ?

私は目が点になった。

しかし、ヒナタはあくまで真面目な表情。

はは〜ん...。

「なんだ。好きな男にでも試したいのか?」

「え、え!?!いや、その、そんな...。」

顔を真っ赤にしてもじもじするヒナタ。

「あなたのそのでつつつかい胸なら、今のをやればどんな男でも虜にできるもんね。」

「そ、あ、うん...。」

「よし!いいかい、とにかくどんな手を使っても相手の顔を自分の胸ではさんじまえば、こっちのもんだ。まずは...。」

その頃...。

「くそっ!どこまでいっても出口が無いってばよ!」
やられた。

俺は敵の幻術にはまり、どんなに進んでも出口の無い空間に閉じ込められていた。

いや、それが俺の精神世界の物だっことはわかっていたが、どんなに自分のチャクラを乱そうとも幻術が解けないのだ。

「いやに強力な幻術だっばよ...。紅先生やサスケよりもすげーかもしんねー...。」

とある村で、住人が次々と原因不明の病に倒れているという情報が入り、その調査に乗り出した俺とサクラちゃん、そしてサイだったが、その病は実は修羅忍が村人が持つチャクラを少しづつ奪っているのが原因だとわかった。

仙術モードで敵を発見した俺は、サクラちゃん達が止めるのを聞かず敵に向かつて…。

「で、今こんな状態かよ…くそっ！」

すでに3日以上はこの世界に居る。

もつとも、それは俺の精神が感じている体感時間であって、本来はきつとそんなには経っていないのだろうけど。

「あゝあ…。サクラちゃん達が外から幻術を解いてくれるのを待つしかねーってばよ…。」

疲れて立ち止まった俺の呟きに、答えるものが一人。

「ナルト…。ワシに肉体をよこせ…。ワシならこんな幻術、一瞬で解くことができるぞ…。」

「九尾か…。」

精神世界だからだろうか、いつもより鮮明に話しかけてくる、俺の中の九尾。

「お前に肉体はやらねーってばよ。」

『くつくつく…。まあいい…。』

九尾…。

俺はこいつのことも救ってやりたいと思っていた。

あらゆる憎しみの化身。災厄の象徴。そんなこいつが不憫に思えるようになったのは、俺が大人になった証拠だろうか…。

そんな事を考えた次の瞬間…！

「ナルト！ナルト！しっかりしなさい！」

サクラちゃんの声に目が覚める俺。ガバッと起き上がる。

「ど、どのくらい経ったつてばよ！」

「ナルトが僕らから離れてから、まだ5分くらいしか経ってませんよ。」

5分…！？それが3日以上に感じてたのか！？なんて幻術だ…！

「ごめんナルト。アイツには逃げられちゃったわ。」

「仕方ねーつてばよ…。アイツ、やっぱり修羅忍だったんだろ？」

「ええ。去り際に名前も言っていましたよ。たしか、八谷岳三治…とか。」

「八谷岳…か。ぜってー借りは返すつてばよ！」

その日遅く。

事件は解決したが主犯には逃げられたとこのことで肩を落として帰ってくるナルト君。

い、今こそ、テマリさんに教えてもらったわ、技を…。

「ナ、ナルト君…。」

彼が一人になったのを見計らって声を掛ける私。

「おう、ヒナタ…。今回は失敗しちゃったつてばよ！」

「残念だったね…。」

…。次の一言がでてこない…。でも思い切つて…！

「ナ、ナルト君！な、慰めてあげよつか？」

「お、おう。いいのか？」

「うん…。」

でも、やっぱり、はずかしい…。

「ご、ごめん…。眼を瞑つてくれる？」

「おう。わかったつてばよ。」

素直に眼を瞑るナルト君。これなら…。

私は深呼吸して、勇気とかを出した。

パフッ。

「ど、どうかな…ナルト君…。」

「ん〜。なんだこれ？リラックスグッズか何か…？」

そう言いながら、眼を開けそうになるナルト君。私は慌てて…。

「だ、駄目！眼を開けないで！」

「ん？あ、ああ。解ったつてばよ。」

わ、私の胸の中にナルト君の顔が…。

赤くなりつつも嬉しさに浸っていると、スーッスーッとナルト君の吐息が…。

「あ〜。なんかわかんねーけど、すっげー落ち着くつてばよ…。柔らかくて、なんかしっとりもちもちして…。それにいい匂いだったよ。」

「そ、そう？」

ナルト君はリラックスグッズだと思っているのだろう。

でもそれならそれで、私も恥ずかしさが少し治まるし。

でも、そんな風に言われると照れちゃうな…。

しばらくすると、疲れがたまっていたのか、ナルト君は眠ってしまった。

私はいつまでも、彼を胸に抱いていた…。

その様子を少し離れたところで見ていたテマリは呟いた。

「ヒナタのやつ、ナルトの事が好きだったのか…。意外だが、今のアイツなら解らんことは無いな…しかし…。」

少し溜息をつく。

「上着をはだけて生で行け…なんて…。教えてないぞ…。」

「病節やまぶしの術…？師匠、あの修羅忍が使った術を知ってるんですか？」

「サクラ。お前の目撃した印や術の特徴から考えると、それしかないだろう。」

「特殊な術…ですよね？」

「ああ。しかも…。」

師匠は真面目な顔をしてこう言った。

「木の葉に伝わる血継限界の一つなんだ。すでに一族は絶えたはずだが…。」

第3話「失敗ナルトと母性ヒナタ」（後書き）

「修羅忍」と言う言葉は「八谷岳三治」や「法善意乱丸」と違い、特に元ネタが無い造語です。

私はコミックス派でして、アニメや映画をしつかりとは見ていないので、どこかでそう言う名前の忍者が出ていたら教えてください。変えます。

ナルト「あー…すっげー安らぐってばよ…。このリラックスグッズ、どこで売ってたんだ？」

ヒナタ「な、ナルト君なら、いつでも買えるよ。お値段は…給料三か月分で…。」

第4話「無自覚ナルトと微笑むヒナタ」

…駄目です、もう体が動きません…！

僕の体術はことごとく防がれてしまい、逆に敵の水遁術が僕の体の自由を奪う。

どうやら相性が最悪の敵だったようです。

止めを刺されるかと思った瞬間、彼は後ろを向き、去っていきました。

「ま…待ってください…！まだ…終わり…では…。」

僕は声を振り絞りましたが、彼は振り返らないまま、

「無駄だ。俺には勝てない。俺は修羅忍の亀重シンバ。いずれまた会う事になるだろう。」

と言つて、そのまま行つてしまいました。

「く、くそっ！」

そして、僕が覚えているのはここまででした…。

「リーさん。体はもう大丈夫ですか？」

ここは木の葉病院。

大怪我で運ばれた僕はそのまま大手術。なんとか一命を取り留めました。

しばらくは絶対安静と言うことで、修行も出来ず退屈な僕を気遣つて、サクラさんは毎日様子を見に来てくれます。

「花の水、取り替えてきますね。」

「ありがとうございます。」

うーん。こんな人が僕の奥さんだったらいいのにな…。

でも、サクラさんにはサスケ君が居ます。

ふつと溜息をついて、僕は窓の外を見ました。すると…。

「うああああああああああ！！！！！！」

叫び声と共に、人影が…。

ガツシャーッ！！！！

窓は粉々に割れ、飛び込んできたのはナルト君。

「ど、どうしたんですか！」

「何！今の音！」

僕の驚きと、慌てて戻ってきたサクラさんの声が被ります。

「い、いや…。ゲジマユが怪我したって聞いて…。さっきまで任務だったから…。屋根の上突っ走ってたら…滑って…。」

「任務？ちよつと、私聞いてないわよ？」

ナルト君とサクラさんは同じ班なので、仕事は一緒の事が多いのですが。

「いや、今回はヒナタと一緒にだったってばよ。最近多いんだ。婆ちゃんから直接の任務は特に。」

「師匠直々？へー…ふーん…そうなんだ。」

サクラさんはなんだか何かを理解したような、それでいて寂しいような表情になりました。

しかし、ナルト君はそのことには気づかず。

「で？修羅忍にやられたってホントか？どんな奴だ？それが聞きたくて慌てて来たんだってばよ。」

と聞いてきました。

「そうですね。水遁使いで、名前はたしか亀重シンバ。」

「ゲジマユの体術が効かなかったのか？」

「ええ。相手が使った覇波逗の術というのがやっかいで、物凄く粘り気のある、酸性の水を生む術なんです。攻撃しても勢いが吸収されて殆どダメージが無く、逆にその酸性で肉体はぼろぼろになっていくんです。」

「キバも、チョウジも、俺もやられた…。修羅忍ってのはなんなんだってばよ。」

「わからないわ。でも、師匠の話ではナルトがやられた術も、リーさんがやられた術も、キバやチヨウジを攻撃した術だって、元は木の葉の血継限界の術らしいわよ。」

「では、木の葉の抜け忍の集団なのでしょうか？」

「解らない…。解らないといえども一つ、そんな圧倒的な力を持つていながら、何故誰も殺されていないのかしら？忍びの世界で相手をわざわざ生かしておくなんて…。」

「だー！もう！わかんねーことばっかで頭痛いってばよー！」

ナルト君の叫びはもつともです。僕も考え事はあまり得意ではありません。

サクラさんは呆れたように溜息をついていますが。

「そうだ！ゲジマユ！見舞いに一楽のラーメン買って来てやるってばよー！」

「ちょ、ちよつとナルト！リーさんはまだそんな食事は…。」

しかし、ナルト君は走り出してしまいました。

「は、ハハ…。もしナルト君が本当に買ってきても…。」

「駄目よ、リーさん。まだ病院食しか食べちゃ。それじゃあ、また来ますから。」

そう言つて、サクラさんは出て行ってしまいました。

少しして、コンコンと扉を叩く音。

「ハイ。どちらです？」

入ってきたのは…。

「あ、あの、リーさん、大丈夫ですか…？」

ネジの従兄妹の日向ヒナタさんでした。

「やあ、どうも。もう結構落ち着いてきたんですよ。」

「よ、よかったです。すみません。任務で見舞いが遅れてしまっ

て…。」

「いえいえ。ありがとうございます。」
手に持っていた花を活けて傍らに座る彼女。

こうしてあらためてみると、口調や態度はまでもじもじしています
が、昔のような「おどおど」という形容は無くなったように思いま
す。

「ああ、そうだ。ここで待っていれば、ナルト君も戻ってくると思
いますよ?」

「え…?」

顔を赤くするヒナタさん。

彼女がナルト君のことを好きなのは里の殆どの人が知っているいわ
ば公然の秘密。

もつとも、鈍感なナルト君は単純に友達として好かれているくらい
にしか感じていないようですが。

「あ、あの…。ナルト君は…どこかに行っただんですか?」

「ええ。僕にラーメンを買ってくるって飛び出しちゃったんですよ。
まだ病院食しか許されていないんですけどね。」

「そ、それは…ナルト君らしい…。」

「まったくです。慌てんぼうなのは昔のままですね。」

「で、でも、そこがナルト君らしい…。」
そういつて微笑む彼女。

昔の「儂い」という言葉が当てはまるようなそれと違い、その笑顔
は美しい。

堪らず僕も笑顔になってしまいます。
と、そこへ…。

「よー。なんの話してるんだってばよー。」

両手にラーメンの丼を持ったナルト君が不機嫌そうに現れました。

「な、ナルト君…。」

すぐに顔を真っ赤にして目をきよるきよるさせるヒナタさん。

やはりナルト君の前で緊張してしまっ癖は治っていないようですね。一緒に任務で大丈夫なんでしょうか…。

「なーんか俺と居る時よりも楽しそうだったよヒナタ。」

「そ、そんな訳じゃ…。」

「ま、いーけどよ。それよりゲジマユ、さっきそこでサクラちゃんにすれ違ったけど、ラーメンはまだ食べれないってホントか?」

「ええ。せつかく買ってきてもらって申し訳ないですが…。」

「んー…。ま、仕方ねーってばよ。でもどーすつか…片方は俺が食べるつもりだったから良いとして…。」

そこでヒナタさんを見るナルト君。

「ヒナタ、お前食うか?」

「え…。う、うん…。」

「そっか。良かった。」

そう言うつと井を彼女に渡すナルト君。どことなく嬉しそうだ。

そして、二人はラーメンを食べ始めた。…伸びるとまずいからって僕の病室で…。

「あの…ナルト君…。それはそれできついんですけど…。」

そのあと、ヒナタさんは早々に退室し、病室に残ったのは僕とナルト君。

「なーゲジマユ。さっきほんとにヒナタと何話してたんだ?」

「何って…。」

ナルト君の話とはちょっと言いづらいですかね…。

「いやな、ヒナタ、微笑んでたろ?」

「え、ええ。そうですね。」

「ゲジマユにもキバにもシノにもあーゆる顔するくせに、俺にはち

「つともなんだってばよ。」

「そう言つてはあと溜息をつくナルト君。」

「俺つてば、ヒナタに嫌われてんのかなあ？」

「思わずずるつと滑る僕。」

「な、ナルト君…。ヒナタさんに好きだつて言われたんでしょ？」

「まー…。でも、あん時はピンチだったし、仲間としては大好きっただけでさ。人間としては嫌われてんのかなつて。」

「よく解らない理論ですが、彼なりに悩んでいるようですね…。」

「ん…？悩んでいる？どうして？こんなに？」

「もしかして、ナルト君…。」

「ナルト君。サクラさんがサスケ君と一緒に居て、楽しそうなのはどう思いますか？」

「な、なんだつてばよ突然…。ま、それはそれで、良かったな上手くいつて、つて思うつてばよ。」

「じゃあ、ヒナタさんが僕やキバ君と話してて笑っているのは？」

「ん…。そうだな…。なんか寂しいつていうか…胸の辺りが締め付けられるような気がするつてばよ。」

「…！」

「とんだ無自覚さんを発見してしまった気がします！」

「…ナルト君。君がヒナタさんに嫌われているかどうかは…君自身で確かめたらどうですか？」

「えー！そんな意地悪言つなつてばよ…。」

「うなだれるナルト君。でも、こういうのつて周りが気づかせてあげるような事じゃないと思つんです。僕は。」

「だから、ナルト君が自分から直接踏み出すようにしないと。」

「それから少し話をして、ナルト君も帰つていきました。」

「羨ましい限りです。ナルト君もサスケ君も。」

「はあ…僕に春は来るのでしょうか…。」

「な、ナルト！リーのとこ行ってきたんだって？」

「おう。ま、思ったより回復してて安心したってばよ。テンテンもこれから見舞いか？」

「ええ！リーの部屋の掃除をしてたら遅くなっちゃった。まったくリーったら、私が着替え持ってってやらないと、ずっとおんなじ服なのよ！」

「ふーん。で、毎日行って洗濯して、ゲジマユの部屋の掃除までして…。まるで奥さんだな。」

「ちょ！ちよっと！」

「照れるな照れるなって。テンテンがゲジマユの事好きなのは、里のみーんが知ってるってばよ。気づいてないのはゲジマユ本人くらいだぜ。」

「…そうなのよね。」

「ま、ゲジマユは超鈍感だから仕方ねーってばよ。じゃあな、頑張れよー。」

そう言っただけで去っていくナルトを見送りながら私は思った。

あんたは人の事言えない、と。

第4話「無自覚ナルトと微笑むヒナタ」(後書き)

今回はあまり進展なしです。

ナルトの気持ちを少しオープンしました。

ちなみにこの物語では、リーはテンテンに対して色々と勘違いしています。

テンテン「まったく！いつつもいつつも洗濯する方も大変なんだからね！あ、今日は掃除もしといたわよ！」

リー(テンテン)…やっぱり面倒かけて怒ってますね…。もう僕なんか放っておいてネジとデートでもすればいいのに…。優しいから放つても置けないってことでしょうか…。()

第5話「約束のナルトと気をつかったヒナタ」

暗い牢の中。

感じるは達成感。考える事は後悔。

兄を殺した事への後悔は日ごとに増していくが、それでもなお一族の敵を討てたことへの達成感は失われる事はない。

こんな俺をお前は笑うだろうか。よくやったとは…言わないだろうな。

里に戻った日の呆然とした、寂しそうな顔が臉に焼きつく。

俺の、初めての仲間にして、最大のライバル。

「…ナルト。」

口に出して呟くと、なお一層寂しさが全身を覆う。

牢を出たら、一番に会いに行くと約束した。

牢を出るまで、会う事は無いと俺から宣言した。

約束どおり、あいつは一度もここには来ていない。

「…サスケ君。今日はこんな事があったの。」

サクラは毎日面会に来る。

俺に面会に来るやつは同期でも殆ど居ない。

いのが数回、シカマルが2、3回くらい…だったか。

「…そうか。それは大変だったな。」

俺にとってはとてもありがたい時間だ。

以前里を出るときはあんなに冷たくした俺にここまで優しくしてくれるのは、心が痛い面もあるが、やはり嬉しい。

「そつえば、ナルトはどうしてる？」

俺はあまりナルトのことは聞かないようにしていた。

約束の事もあるが、ナルトを気にかけていると思われたら恥ずかしいからだ。

「ナルト？ああ、最近はヒナタとよく任務に出ているわよ。アイツ面会にきてない訳？」

サクラは俺とナルトの約束を知らない。

俺も話していないし、ナルトも特別言うことはなかったのだろう。

「ヒナタと？…そうか。上手く、いつているのか？」

「上手く？ぜんぜん！あの鈍感馬鹿、ヒナタの気持ちに全く気づいてないのよ。」

「鈍感馬鹿…。」

「しかも！リーさんの話じゃ、自分の気持ちもよく解ってないみたいなの！」

「自分の気持ち？」

「ナルトは、ヒナタの事を結構気にかけてんのよ！あれは絶対に恋してるわね！」

「ナルトは…サクラのことが好きなんだと思っていたがな…。」

「…実を言うと、私もね。そう思ってたりして。」

サクラはそう言うと、ちょっと溜息をつく。

「別にアイツとどうこうって思ってたわけじゃないけど、いざそうなってみるとなんか寂しいのよね…。」

「…そうか。」

俺は、なんとなく分かる気がした。

アイツにとつて、仲間が大切なものでなくなった訳ではないだろう。

ただ、仲間よりも大事なものが出来つつある、というだけだ。

それを寂しいと思うのは、俺たちの我儘かもしれないが。

「じゃあね、サスケ君。また明日、来るから。」

サクラが去ってしまうと、牢の中には静寂が戻る。

俺を再び後悔と達成感が襲う。

だが、今日はもう一人、訪れる者が居た。

「さ、サスケ君…。」

「…ヒナタか。」

しばらく会わないうちに綺麗になったものだ。

「ご、ごめんなさい…面会に全然来れなくて…。」

「気にする事はない。だが、ならば突然どうした。」

「そ、その…な、ナルト君が気にしてて…。でも、サスケ君との約束があるから来れないって…。」

それでナルトの代わりに様子を見に来たというわけか。相変わらず、ナルトにベタ惚れのようだな。

しかし、ナルトのやつにも驚きだ。

サクラにすら話していない俺との約束の事を、ヒナタには話したんだな。

「そ、それで…。」

「ああ。俺はいたって問題ない。牢の中では何も出来ないから、退屈ではあるがな。」

「そ、そうですね…。」

「…イタチの事は、少し後悔している…。落ち着いて考える時間が増えたからかも知れんが、もっと話をする事はできなかったのか、とな…。」

「…。私は、サスケ君とお兄さんの間に何があったのか、詳しくは知りません…。でも、起きてしまった過去は忘れないで、それでいて前を見続けるのが、良いと思います…。」

「ナルトのように…か？」

「え、そ、そんな…。」

顔を真っ赤にするヒナタ。

確かに、ナルトはそういう奴だ。

アイツは決して前を向く事をやめない。怖がらない。

俺にもあんな生き方が出来れば、もっと違った今があったのかもしれない。

「い、今からでも、遅くは無いと思います。」

俺の心を見透かすように、ヒナタがそういつて微笑んだ。
…なるほど。

「お前と居ると…アイツを傍に感じる気がする。」

「え…？」

「それだけ、お前の傍にアイツがいるということだ。」

「そ、そんな…。」

「かつての仲間として、お前に頼む。ナルトをよろしくな。」

「わ、私は…そんな…。」

照れて顔を赤くするヒナタ。しかし、ふと表情を変え、真顔で俺の目を見つめる。

真剣なまなざしに、俺のほづが少し照れる。

「…かつての、だなんて…。ナルト君は今でも、いつまでも、サスケ君を仲間だと思っていますよ。」

（何言ってるんだ！サスケはずっと、ずっと、俺の、俺たちの仲間だってばよ！）

ヒナタの白眼に、アイツの顔を見た気がした…。

「な、ナルト君…。」

ヒナタがサスケのいる牢から面会を終えて出てきた。

「サスケに会いに行ってたのか？」

「う…うん…。」

キバから話を聞いて、俺はなんでか居てもたってもいられず、牢の

前まで来てしまっていた。

サスケとは約束があるから、牢には入らず、その前でじっと待っていたわけだが。

「なんで…。」

俺はヒナタに尋ねた。

別にヒナタがサスケに会うのはおかしい事ではない。

同期の忍が牢にいたら、面会くらいしても不思議は無い。けど。

俺は何故か嫌な気分になってしまっていた。

「な、ナルト君が、サスケ君の様子を気にしていたから…。」

「俺の代わりに…?」

それを聞いて、一気に心が軽くなる俺。

一体どうしてしまったのか、自分でもさっぱり解らない。

「で、どうだった?」

「うん。大丈夫そうだったよ。ナルト君に早く会いたいみたいだった。」

「そっか…そっか。うん。よかつたってばよ。」

サスケが俺を待ってくれている。

それは、嬉しい知らせだった。

あいつの考えていることが解らなくなってしまった時期もあったが、やはり仲間は仲間だった。

「よし、ヒナタ。帰るってばよ。」

「う、うん。」

「そうだ、一楽寄っていいこうぜ。今日は奢るってばよ。」

「え…一緒に…食事?」

「嫌か?」

顔を真っ赤にして首を振るヒナタ。

なんか可愛い。

…。

可愛い?

俺は何を…？

「…誰だ。」

牢の中で、俺は人の気配を感じた。

面会に誰か来たわけではないようだが、何故…。

すると、突然地面が盛り上がり…中から人が出てきた。

「ようう。あんたがうちはサスケか。」

大柄で、人の良さそうな顔。ぼさぼさの髪。

だが、木の葉の牢に侵入してくるやつが、いいやつなはずはない。

「貴様…何者だ？」

「俺？俺たちは修羅忍の一人、小松兵金次郎さ。」

「どうやって侵入した…。ここは牢。すべてのチャクラは強制的に閉じられるはず。」

「忍術じゃ侵入は出来ないさ。力任せに行こうとしても、この壁、むっちゃくちや硬くてどーしよーもなかったぜい。」

「なら…。」

「純粹な体術で地下を掘り進んだだけだつてーの。」

…純粹な体術だと？

この牢は壁ほどでもないが地面だつてかなり硬い。

そんな中を掘り進むなど、リーやガイでも難しいはずだ。

「でさでさ。アンタを俺たちの仲間に勧誘しに来たんだ。」

「なんだと？」

「あんたに光はにあわねーぜ？俺っち達と一緒に来ないか？」

きらきらした表情で尋ねてくる。しかし、俺の心は決まっている。

「断る。俺は木の葉の忍だ。闇に戻る気は無い。」
その瞬間。

どおん！

やつは壁を力任せに叩いた。

…めりこんでいる。

「なあ？俺つちを困らせるなよ？」

表情は変えず、しかし、言葉には明らかな威圧が混じっている。しかし。

「俺の答えは変わらない。」

…。

沈黙が続く。

…。

「そつか。じゃ、いいや。」

だが、やつは突然そう言っていると、自分があけた地面の大穴に戻っていた。

やつの気配が消えたのを確認し、俺は息を吐く。

とたんにどつと冷や汗が流れる。

「くそつ…！なんてやつだ…。」

もしもこの牢のなかで襲われたら、チャクラが使えない俺はひとたまりも無かつただろう。

いったい何者なんだ…。大蛇丸の手の者でも、暁でもない…。

「修羅忍…だと…？」

「ナルト君…。口元…。」

ナプキンでナルトの口元を拭くヒナタ。

「さ、サンキュー…。」

照れて顔を赤くするナルト。

さては、ナルトのやつ…。

「ねえ、お父さん…。この二人…。」

「おう、どうやら、そのようだぜ。」

娘のアイメとひそひそ話していると、ラーメンをすすっていたナルトが気づく。

「テウチのおっちゃん、どうしたんだってばよ？」

「いやいや。ナルト。お前がこんな可愛い彼女を連れてくるなんてな。」

ニヤニヤしながらそう言うと、ヒナタは顔を赤くしたが、ナルトは真顔で。

「何言ってるんだってばよ。ヒナタは仲間。大事な仲間だってばよ。」

それに俺が好きなのは…。」

そう言いかけて、ナルトの箸が止まる。

「?どうした?ナルト。」

「いや…なんでもねーってばよ…。」

そう言ってナルトは再びラーメンに取り掛かる。

しかし、その表情は何故か複雑そうだった。

第5話「約束のナルトと気をつかったヒナタ」（後書き）

この世界にはうちはマダラは居ないため、サスケはイタチの真実を知らず、只単に一族の敵を討ったことになります。

しかし、この二人、原作でもそうだが、お互いを意識しすぎだと思
うんですが…。

ナルト「そういえば、サイのやつが、俺とサスケを見て『二人はもしゃ、BLってヤツですか？』とか聞くんだけどよ…どういう意味だ？」

ヒナタ（！！！！ナ、ナルト君とサスケ君のBL…はあはあ）

ナルト「ヒ！ヒナタ！大変だ！鼻血がでてるっばよ！」

第6話「モヤモヤナルトと思われヒナタ」

「よし。今日の任務も無事終了だ。よくやったぞ、ナルト。」

「へへへ。カカシ先生も、体はすっかり大丈夫みたいだな。」

その日、俺はカカシ先生と2人で3日ほど任務に出ていたが、無事に終わって夕方帰路についていた。

木の葉の里につき、門をくぐる。

「お帰りなさい、カカシさん。ナルト。」

「おう！今帰ったってばよ！」

「ナルト、お孫様が首を長くして待っていたぞ？なにか約束があるんだろ？」

「あ…そういえば木の葉丸と組み手の約束してたのに、任務が入って…。」

俺は木の葉丸に『戻ったらすぐ組み手をする』と約束していたのを思い出した。

「ところで、何か変わった事はあったかい？」

門のところで番をしていたおっちゃんにカカシ先生が問いかける。

「ん…。そう言えば、2人が任務に出た日の午後に、近くの川でおかしな忍に襲われたっていう男達が保護されているよ。」

「おかしな忍！？まさか…修羅忍ってヤツか!？」

「さ、さあ…。俺はそこまで詳しくは…。ただ、そうらしいという噂はあるが…。」

「カカシ先生！俺、そいつら探して聞いてみるってばよ！じゃあな！」

俺はすぐに走り出した。

「お、おい…。あとで綱手様に報告に行ってくれよ。俺はこのまま次の任務が…。」

「わーっ たってばよ！」

「…っ たく、元気だな、若いモンは…。」

何の情報も無いまま闇雲に走っていると、前方にヒナタが見えた。

「お、お〜い、ヒナタ〜。」

…。

ちよつと遠かったか、声が聞こえなかったようだ。

誰かと会話している。

…笑顔で。

俺がさらに近づくと、ようやく気づいたヒナタは、またその笑顔を消して、顔を赤くして俺を見た。

「な、ナルト君…。お帰り。」

「ナルト？ヒナタちゃん、こいつがナルトかね？」

ヒナタちゃん…だと？

ヒナタと会話していたのは、俺たちと同じ歳くらいの男だった。里では見ない顔だ。

俺はなんだかもやもやした気分になった。

「ヒナタ、誰だつてばよ、こいつ。」

「あ…。この人は、ちよつと前に修羅忍に襲われて、木の葉病院で手当てを受けていたの…。」

俺が睨むと、その男はちよつと気障に笑い、一步前に出た。

「やあ、噂は聞いてるがね。あんたがナルトかね。俺は不破キリヤ。よろしくだがね。」

喋り方にちよつと癖がある。だが、しゅつとした顔立ちのスマートな青年。

どこかサスケやサイに似た雰囲気の子だ。

「修羅忍に…。」

どんなやつだったか。どんな術を使ったのか。聞こえなかったのに、何故か俺は声が出ない。

と、キリヤはヒナタの手を取った。

「しかし、助かったがね。俺が軽傷で済んだのはヒナタちゃんのお陰かね。」

「そ、そんな…。私はたまたま通りかかったただけで…。」

もやもやが止まらない。

俺は、ずっとその場を去ってしまった。

「な、ナルト君…。」

「いいかね。任務だったんだろ？きつと疲れてるんだがね。それより、木の葉をもっと案内して欲しいかね…。」

後ろからヒナタとキリヤの声。

ますます俺は歩くスピードを上げる。

自分でも、一体どうしてしまったのか、解らない。

木の葉病院。

ここにはあのキリヤと一緒に運び込まれてきたヤツがまだ入院しているらしい。

俺はサクラちゃんを見かけて声をかけた。

「サクラちゃん。ここに修羅忍に襲われたってヤツが入院してるって？」

「あ、ナルト。そうよ。今から様子を見に行くところなんだけど、一緒に行く？」

「お、おう！行くつてばよ。」

俺はサクラちゃんについていく。

「ところで、なんでサクラちゃんが様子を見に行くんだ？」

「私とヒナタが川縁で怪我をしている2人を見つけたの。だから気になっちゃって。」

「そっか…。」

俺は笑顔のヒナタとイケメンなキリヤを思い出して、またモヤモヤし始めた。

「ここよ。すいませ〜ん。」

「はい。」

サクラちゃんが指差す戸の奥から渋い声が響いた。

「どうですか…お加減は…。」

「ああ。大分良くなつてはきています。」

そう言つて、その男はサクラちゃんの手を握つた。

…。

いいのかな〜。サスケに言つちゃうぞ？

あ、会いには行かない約束だから、無理か。

「…ところで、サクラさん。そちらは…？」

「あ、俺？俺はうずまきナルト！よろしくな。」

「ナルト君ですか。私は潮次団子。よろしく。」

だんご…。美味そうな名前だ。

しかし、名前に似合わず渋い声、渋い顔立ち。男の俺から見てもダ
ンディーだと思つてしまう。

「そつえば、修羅忍に襲われたんだつて!？」

「修羅忍…というのかは知りませんが、私とキリヤが町に行商に向
かっている時、突然体を溶かす水に襲われたのです。」

体を溶かす…。

きつとゲジマユを襲つたやつだ。

「木の上に誰かがいたのは見えたのですが、体の痛みを失い、
気がつくところここに居たのです…。」

「そっか…。大変だったな…。」

修羅忍についての情報をもっと聞きたい。
しかし。

次に俺の口から出た質問は、俺にも予想がつかない言葉だった。

「ところで、キリヤってどんなヤツだ？」

「キリヤ…ですか。ちよつと掴みどころが無い部分がありますが、一言で言えば「良いヤツ」ですよ。そういえば、アイツは私より軽傷でしたね。」

「そ、そっか…。」

「彼とは一緒に仕事を始めてまだ間が無いので、あまり詳しくは知らないんです。ですが…何故そのような事を？」

「あ、いや…別に何でも無いってばよ。」

「そう。」

「自分でも分からない。何故、修羅忍のことより、あのキリヤのことが気になるのか。」

「じゃあナルト。わたし、まだ潮次さんとお話があるから。」

「サクラちゃんはそう言って部屋に残るが、俺は帰る事にした。」

「なんだかんだ言っただけで任務明け。そろそろ疲れのせいか眠くなってきたのだ。」

「わかったってばよ。じゃあな、サクラちゃん。団子さん。」

「俺は部屋を出た。後ろから2人の声が聞こえる。」

「サクラさん…。私のことは名前で呼んでください。貴女には、そうしてほしい…。」

「そ、そんな。」

「あゝあ。あの男。サクラちゃんに惚れてるな？」

「サスケが知ったらどんな顔するのか、見てみたいってばよ。」

「そんなことを考えながら、家へ向かっていると、俺はあることを思い出した。」

「あ…。そういえば、木の葉丸と会って組み手する約束してたの忘

れてた…。」

俺は方向転換する…が、そこでまた思い出した。

「…って！綱手のばーちゃんところにも行かなくちゃ！」
うーん…。」

俺は迷った挙句…。

「影分身の術！」

2人に分身した。

「よし！俺（本体）は組み手があるから木の葉丸のところに行く！
ばーちゃんところは任したってばよ！」

「わかった！任しとけてばよ！」

そして、俺たちは別々に歩き出した。

ばーちゃんに報告を終え、火影室を出る。

「さって…影分身は解くか…。」

「あれ？ナルト？」

印を結ぼうとした瞬間、そこにサイが通りかかった。

「サイ！どうしたってばよ？。」

「こっちの台詞ですよ。なんで影分身？」

「いや、色々あって…。」

「僕は、ダンゾウ様に呼ばれていてね。一応、まだ『根』にも属するんで。」

「ふーん…。大変だな…。」

「そういえば、さつき病院でサクラに聞きましたよ？なんか元気が無かったって…。」

「あ、ああ…サイも団子のところに行ったのか。」

「ええ、まあ。」

「サクラちゃん、俺のことそんな風に？」

「ええ。何かあったんですか？」

「実はよ…。」

俺はヒナタとキリヤに会ってから胸がモヤモヤすることをサイに話した。

「…そうですね。それは気になりますね。」

「だろ？俺も自分でなんであのキリヤが気になんのか、わかんねーんだ。」

「…ナルトは仙人モードを身につけましたよね。」

「ああ。それがどうかしたか？」

「仙人モードは他人のチャクラなんかで周囲を感知する事ができる…。」

「まあな。」

「その影響が通常時にも出ているのでは…？」

「…どういう意味だってばよ。」

「…僕が先ほどダンゾウ様に呼ばれた理由。それが、その潮次団子と不破キリヤの監視なんです。」

「監視？」

「修羅忍に襲われたと言っていますが、実際にサクラ達が発見したのは襲われた後。もしかしたらそれはフェイクで、2人が修羅忍なのではないか…と。」

「な！なに！」

「もちろん、確証は無いとの事だったのですが、ナルトの感知能力が不破キリヤの何かに引っ掛かっているのではないかと。」

「そ、そうか…。もしかしたら、あいつら修羅忍…。」
サイの言う通りかもしれない。

俺の感知能力が通常時でも出るのかどうかはわかんないが、もしかしたらキリヤの何らかの違和感に反応したのかも…。

「ナルト。まだ『そうかもしれない』ってだけですから、すぐに行

動は起こさないでくださいな。監視は僕の役目ですから。」
「ああ。わかったつてばよ。サンキューな、サイ。」
俺はサイに礼をいい、影分身を解いた。

数刻前。

ここは木の葉の演習場。

「いやー、木の葉丸。強くなったつてばよ。」

影分身、螺旋丸、そして知らないうちに口寄せまで使えるようになつていた木の葉丸は本当に強かつた。

「つても！ナルト兄ちゃんには敵わなかつたぞ、コレ！」

「へへへ。まだまだお前に追い抜かれるわけにはいかねーつてばよ。」

と、言つても俺が螺旋丸とかを使えるようになった年齢より若いんだよな、こいつ。

さすが火影の血…。つて、俺もだけど…。

と、そこへ。

「木の葉丸ちゃん。」

モエギが呼びにやつてきた。

「お、可愛いガールフレンドのお呼びだぞ。」

「そんなんじゃないよコレ！」

そう言いながらも、俺に一礼をして、木の葉丸は走つていった。

「さつて…俺も帰るか…。」

家に向かおうとした俺。

と、そこへ。

「あら、ナルトじゃない。」

現れたのは、いの。

「いの！どうしたんだ、こんなところで。」

「チヨウジが新技を身につけるって言うから、怪我しないように見てやってたのよ。」

「そうか。修羅忍にやられたのが悔しかったんだな。」

「まったく、チヨウジにしては珍しくね。」

「で？その当人はどうしたってばよ。」

「あっちでへばってる。こっちで音がしたから見に来たの。」

「そっか。」

「それにしても、お孫様：じゃない、木の葉丸君も強くなったわね。あの歳であれなら、そのうちナルトより強くなるかもよ。」

「はは、『ナルト兄ちゃん』としては、そうなって欲しいような、欲しくないような、複雑な気分だつてばよ。」

複雑な気分。

自分で言つてなにかを思い出した俺。

「そういえば…いのもキリヤってヤツに会った？」

「え？ええ。修羅忍に襲われたつていう…。イケメンよね。キリ

ヤ君。ヒナタに興味津々で、私は入り込めなさそうだったけど…。」
興味津々…。

俺はまたモヤモヤし始めた。

「どうしたの、ナルト？なんか複雑な表情して…。」

「お、おう…実は…。」

俺はヒナタとキリヤに会ってから胸がモヤモヤすることをいのに話した。

「はあ…。あんだねえ…。」

「???？」

「じゃあ、団子さんはどうなの？サクラと仲良くしてたでしょ？」

…。そういわれれば、そうだ。

サクラちゃんと団子をみても、こんな感じはしなかった。

「ってことは、あんたは『キリヤ君がヒナタと仲良くしている』こ

とにモヤモヤしてんのよ。」

「なるほど…。で？」

「で？って…。それがどういうこと事かは、自分で考えなさい…！」
いのはそう言っただけささで行ってしまった。

「…。」

サクラちゃんが団子と居ても気にならない。

ヒナタがキリヤと居ると気になる。

ヒナタが男と居ると？いや、男と楽しそうにしていると気になる…？

「おいおい、それって…。」

…。

その時。

びくっ。

何かが戻ったような感触。

そっか。影分身の方が役目を終えて術を解いたんだ。

刹那、影分身のほうの経験がフィードバックする。

…。

「そ！そう言うことか！」

キリヤが修羅忍かもしれないから、気になっていたのか、俺は！

なるほど、納得したってばよ！

まあ、サイにも言われたが、すぐに問い詰めるのは得策ではないな。

ここはしばらく様子を見るってばよ。

ははは、なぐんだ、そっかそっか…。

第6話「モヤモヤナルトと思われヒナタ」（後書き）

イタチを倒して、そのまま里に戻ったサスケ。

故に、ダンゾウは何事も無く生きています。

ただ、この世界ではペイン戦のあと綱手は戦線離脱せず、火影を続けているようです。

ナルト「キリヤ……。そんなイケメンな感じじゃなく、髪の毛で『3』って形の鬘をつくったらどうだ？」

キリヤ「どう言う意味だがね！」

ナルト「いや、その、『』がね』ってーのが……。」

キリヤ「誰がろっそく人間だがね！」

第7話「自問自答ナルトと決意のヒナタ」

あれから数日。

不破キリヤと潮次団子はまだ木の葉の里に滞在している。

サイを筆頭に木の葉の暗部、『根』の連中が監視を続けているようだが、今のところ怪しい動きは無いそうだ。

実際『修羅忍かもしれない』レベルでは拘束するわけにもいかず、怪しい行動も特に無しではサイも監視までしか出来ないらしい。

そんなある日。

俺はまた、ヒナタとキリヤが並んで歩いているのを目撃してしまっ
た…。

「ヒナタちゃん、いつもお世話になってるから、今日は俺が奢るかね。何か食べたいものはあるかね？」

「え、いいですよ、そんな…」

もじもじと断るヒナタ。

「遠慮する事ないかね。お、たこ焼き屋があるかね！」

そう言つて駆け出し、すつ転ぶキリヤ。小銭がジャラつとばら撒かれる。…ドジなヤツ。

その様子を見て、ヒナタがふふつと笑顔になる。

「もう。また…。キリヤ君、よく転ぶよね。その度に小銭をばら撒くんだから…。」

しよっちゆうコケるのか。マジでドジだな。

…そして、それをよく見るって事は、よく一緒に居るって訳で…。

「お、やっぱりヒナタちゃんはその笑顔が素敵だね。」

…。
なんかもやもやする。

しかし、あんなドジなヤツがほんとに修羅忍なのか？

俺の居る路地影にも転がってきたキリヤの小銭を拾い上げ、ふと疑問を抱く。

「でも、もしアイツが修羅忍じゃないとしたら、サイの『仙人モードの影響でキリヤが怪しいと感知し、それゆえ気になっている』という推論が成り立たなくなってしまう…。」

「よう、キリヤ、ヒナタ！」

俺はポケットに手を突っ込み、意を決して前に出た。

「おお、ナルトかね！ナルトもたこ焼き食うかね？ついでに奢るかね！」

「な、ナルト君…。」

「まただ。」

またヒナタは顔を真っ赤にしてもじもじしながら俺を見る。

だが、それは先ほどの笑顔のような輝きは見えない。

なんなんだってばよ…。」

あまりもやもやしていた俺は、ついヒナタの腕を掴んだ。

「ヒナタ、ちよっと…話があるってばよ。」

「え？な、何？ナルト君…。」

「ここじゃちよっと…。キリヤ！ヒナタとちよっと大事な話があるから、連れてっていいか？」

「構わんかね。じゃあ、また今度、なにかご馳走するかね。」

キリヤに許可をもらい、俺はもじもじするヒナタを連れて、近くの路地裏に入った。

「…ど、どうしたの？ナルト君？」

「なんで、だってばよ…。」

「え…？」

「なんでヒナタってば、俺には笑顔を見せてくれねーんだ？」

俺は遂に、疑問に思っていた事を口にした。

「そ、そんなつもりは…。」

「キバや、シノや…キリヤにはあんな笑顔見せるくせに、俺が近づくとただモジモジしてるだけだっつてばよ!？」

「そ、それは…。」

はつきりしないヒナタに、俺は少しイライラしてしまった。

「俺の事が気に喰わねーんなら、はつきり言ってくれ!」

「わ、私、そんなつもりじゃ…。」

「じゃーなんでだよ!なんで俺には笑いかけてくんねーんだ!？」

「…。」

俯いて、何も言わないヒナタ。

「あー!もう!わかった!そっちがその気なら、俺の方がもうヒナタには近づかねーっつてばよ!」

「え、そ、そんな…。」

「じゃあな!キリヤと仲良くすればいいっつてばよ!」
そう言っつて、俺は走り出した…。

「で…。ヒナタと喧嘩しちまったっつー訳ね…。」

「ああ…。」

勢い任せであんな事を言ってしまった俺だが、それでもややもやが晴れるわけでもなく、たまたま通りかかったシカマルに愚痴をこぼしていた。

「お前な、なんでそんなにヒナタの笑顔にこだわるんだ?」

「え…。そりゃ、仲間だからな。それに俺にだけ笑顔見せないってのは…。」

サクラさんは私の顔をじつと見つめる。

「まず、その照れ症を治さないかね…。」

「え？」

「今回の事は確かにナルトが悪いけどさ。ナルトの前で笑顔にならないのは確かに問題かもしれないわ。考えてもみて？もしナルトが私やキバやリーさんには笑顔で話すけど、貴女が声を掛けたとたん笑顔じゃなくなったら…？」

「そ、それは…。」

私は想像して凄く哀しくなった。

「ね？ナルトもそう言う風に思ってるって訳。」

「そ、そんな…私…。」

「ヒナタ！心がけ次第よ！とにかくナルトの前でもあがらないように心がけるの！」

「う…うん…。」

「どーせナルトなんかその場の勢いで言っちゃっただけなんだから、次に会った時にとびきりの笑顔を見せてやれば、すぐに仲直りできるわよ。私からもきつく言っというてあげる。」

出来るかな。

…ナルト君の前であがらずにいる、なんて…。

でも、サクラさんの言うとおりだ。

私は頑張ってみようと決意した。

俺は家の中で一人、シカマルの言うとおり自分の気持ちについての考えを試みた。

…いや、厳密には一人ではない。

影分身の術で5人になって相談していたのだ。

「だから、気になるのは、俺がなんでヒナタの笑顔が見たいか、じやねーの？」

「ばーか。仲間だからに決まってるんだろ！」

「じゃあじゃあ、なんでキリヤと一緒に居るのを見てモヤモヤしてたんだ？」

「キリヤが修羅忍だからだってばよ。」

「いや、あんなドジなやつが修羅忍か？さっきだって、小銭ぶちまけてたってばよ。」

「…そういや、拾った小銭ポケットに突っ込んで、返すの忘れてたってばよ…。」

「あ！泥棒発見！」

「俺が泥棒ならお前もだろ！お前も俺なんだから！」

「うっせー！話を戻すってばよ！」

「キリヤに限らず、キバやシノや他のヤツといっても、ヒナタは笑顔だってばよ。それ見てもちよっと悔しがってたのどこのどいつだってばよ。」

「俺…かな？」

「俺だ。」

「俺も。」

「俺もだってばよ。」

「お前ら皆俺なんだから当たり前だろ。」

「つまり、ヒナタの笑顔を見たいのは、俺には笑顔を見せてくれないのが悔しいから、だな。」

「じゃあ、なんで悔しいんだってばよ。」

「ばーか。仲間だからに決まってるんだろ！」

「でもでも、シカマルの言うとおり、いのやテンテンや…他のやつ

がそんな風にしても悔しくなんか無いってばよ。」

「むしろ、いつも通りだよな、女の子に怒られたりするのよ。」
「いつも通りってどうなのよ。」

「大体、あいつらちよっとしたことですぐに怒るだろ?」

「ああ。みんなシズネのねーちゃんみたく優しけりゃいいのにな。」
「今は関係ねーだろ、それ。」

「それにつけても、ラーメン食べたい。」

「あ、俺も。」

「一楽行く?」

「ばーか。また脱線しやがって。」

「…話を戻すってばよ。」

「他のやつならなんとも思わない…そういうえば、サクラちゃんと団子の様子を見てもなんとも思わなかったってばよ。」

「つまり俺は、ヒナタだから、悔しいと思うわけだな。」

「…それって。」

「ああ。」

「うん。」

「ヒナタが特別…ってことか?」

「俺にとって?」

「仲間が、じゃなくてヒナタが、笑顔を見せてくれないからイライラする。」

「仲間が、じゃなくてヒナタが、他の男と楽しそうにしているのがモヤモヤする。」

「仲間の、じゃなくてヒナタの、笑顔が見たい。」

「…そう言うことだってばよ…。」
結論は出た。

俺は影分身を解く。

シカマルの、いや、そう言えはいのも似たような事を言っていた。自分の気持ち。

「…たく…。俺ってば、ゲジマユの事笑えないよーな鈍感だったん

だな…。」

俺は、ヒナタが好きなんだ。

仲間として、じゃ無く、一人の女性として。

「…でも、俺ってばヒナタに笑いかけてもらえないってことは、ヒナタは俺の事好きじゃないんだろ…。」

前に戦場で言われた言葉がリフレインする。

『私はナルト君が大好きだから。』

でも、あれは、仲間としてってことで。

やられかけていた俺を励ますために言った言葉だったんだろうな。

「はあ…やるせない…。」

俺は自室のベッドにうつぶせに横になった。

「鈍感だと気づいたのはいいけど、肝心の部分はまだ鈍感だがね…。」

夜の闇の中、監視を続ける暗部に聞こえないほど小さな声で呟くキリヤ。

「自分の気持ちだけでなく、相手の気持ちも察してやれるのが、男ってもんだがね。」

ここは木の葉の里のはずれ。もちろん、ナルトの家からはかなり離れている。

「…まあいいかね。そろそろ仕掛けも十分だし、暗部の連中の監視の下に居るのもいい加減ムカついてきたかね。団子の方が終わったら、戻るかね…。」

第7話「自問自答ナルトと決意のヒナタ」（後書き）

オリキャラが本編に密接に絡んでくるのってあんまり好きじゃないなあ…と。

思っていたのにこの惨事。

惨事ってか。

くるくる眉毛の海賊料理人が出すおやつは文〇堂…という前時代的発想の私はもう若い子にはついていけませんよ。

ヒナタ「…ナルト君はいいなあ…。自分しか居なくても相談相手が居て。」

ナルト「そうでもねーってばよ。アレをやっても結論でねー事の方が多い。」

ヒナタ「え？なんで？」

ナルト「だって、発想も知識も知能も全員同レベルだから…。」

第8話「戦うナルトと捕らわれヒナタ」

しばらくヒナタに会わない日が続いた。

お互いに任務に出ているわけでもなく、里に居るのに…だ。

自分の気持ちを自覚した俺は、今になって自分の発言を猛烈に後悔していた。

「はあ…。なんであんなこと言っちゃまったんだ…。」
部屋で一人、溜息をつく俺。

すると、どこからともなく声が聞こえてきた…！

「ナルト…聞こえているかね？」

この声は…。

「キリヤ！？ いったいどこから…。」

あたりを見渡しても、窓の外を見てもその姿は無い。

しかし、確実に声はする。

「どこだ！ どこだってばよキリヤ！」

「ナルト、よく聞かかね。…ヒナタちゃんを預かった。」

「は、はあ？」

「この子は可愛いし、タイプだがね。うちのアジトに…修羅忍のアジトに連れて行くかね。」

…！

修羅忍…！

やはり、キリヤは修羅忍だったのか…！

「返して欲しくば、木の葉の里の東、丘の一本杉まで、一人で来るかね。」

「くそっ！ 待ってるよ、キリヤ！」

俺はあわてて家を飛び出した…！

満月の夜。

木の葉の夜は早い。すでに街中は静まりかえっており、人に見られることは無かった。

俺はキリヤの指示通り誰にも告げずに急いでいた。

と、一本杉へ向かう途中、人が数人倒れているのを発見した…！

「サイ！それに…この面は暗部の連中か！」

駆け寄り、サイを抱き起こす。

「どうしたつてばよ！」

「な、ナルト…キリヤに突然…。」

それだけ言うと、サイは気を失った。

「サイ！くっそー…！」

これだけの暗部、そして実力のあるサイを倒したとなると、どうやらヤツも相当な実力者だったようだ。

「あの笑顔や仕種は演技だったってことか…。」

俺はヒナタに笑いかけるキリヤや、小銭をぶちまけるキリヤを思い出していた。

一本杉。

「キリヤ！約束どおり一人で来たぜ！どこだつてばよ！」

俺の声に反応したかのようにポンツと音がして、キリヤが姿を現した。

縛られた状態のヒナタを抱きかかえている。

「てめーヒナタを返しやがれ！」

「返しやがれ…かね？喧嘩してたんじゃないかかね？」

「なに!？」

「どうしたらいい?って相談されたから、色々聞いてあげたかね。」
「そういいながら、ヒナタをゆっくり一本杉に持たれ掛けさせるキリヤ。」

「…ヒナタは、なんて…」

「それは俺からは言えないかね…。それを聞きたければ、まずは俺からヒナタちゃんを取り返してみせるかね!」

瞬間、目の前に居たはずのキリヤが消え、俺の真後ろから殺気を感じた。

クナイで斬り付けて来るキリヤを間髪避ける。

「は、速い…!」

瞬身の術…にしては速い。

「影分身の術!」

俺は5体の分身を出して、一緒に突撃する。しかし、ぶつかる瞬間、キリヤがまた消え、今度は左斜め後ろに現れた。

「土遁、岩節棍の術!」

キリヤが槍状の岩を飛ばしてくる!

「くっ!」

影分身2体がやられたが、攻撃の隙を狙って他の2体が上空から飛び掛る。しかし、今度もキリヤは消える。

「遅いかね!」

今度は右斜め前!しかし、俺ももう1体の影分身と、術を準備していた。

「喰らえ!螺旋丸!」

不意をつけた、当たる!そう思ったが…。

キリヤはまた消えた。今度は少し離れた正面に現れる。

「速い…なんてもんじゃない。まるで…」

「木の葉の黄色い閃光…かね?確かに、よく言われるかね。」
そう。

話に聞いていた四代目火影…つまり、俺の父ちゃんの技に近い感じ

がする。

普通の瞬身と違う、まさに神速の速さ…！

「実際関係は無いかね…。しかし！」

背後からキリヤを襲おうとした影分身たちは、土遁で吹き飛ばされる。

「…速い事に変わりは無いかね。」

「くっ…！」

そして、また背後を取られる俺。

「螺旋丸！」

俺は回避のため、ぶつからずに手元に残っていた螺旋丸を地面に叩き付けた！

衝撃で地が割れ、堪らずキリヤも飛びのく。

と…。

俺は何かがその爆風に乗って浮かび上がるのを見た…！

月明かりに照らされ、金色に輝く…。

「こ、小銭…？」

そう。こんな丘の上で、小銭が幾つか舞い上がったのだ。

そして、その次の瞬間、俺は目を疑った。

俺の頭上まで飛び上がった一枚の小銭が、刹那、キリヤに変わったのだ…！

「うおっ！」

上空からのキリヤの攻撃を回転して避け、今見たことを整理する。

（そ、そう言えば、父ちゃんの瞬身は時空間忍術で、印を施した箇所に瞬時に移動するって聞いたことがあるってばよ。ってことは、もしかして、ヤツにとっては小銭がその印の代わりを果たすのか！？）

あわてて地面に落ちた小銭を確認しようとする。

しかし、丘の上は雑草が茂っており、一度地面に落ちた小銭はそう簡単には発見できない。

「気づいたかね…？しかし、意味は無いかね！」

そう言っつてキリヤが再び視界から消えた、その瞬間…！

「ナルト君！右斜め後ろ！」

俺がここ最近、ずっと聞きたくて仕方無かった声が、俺に敵の位置を教えてくれる。

「な、ヒナタちゃん！気づいたのかね！」

驚いたのか、一瞬キリヤの動きが鈍くなる。

「そこだ！」

突然の事で術は間に合わなかったが、俺の渾身のパンチが今度こそヒットした！

「ぐおっ！」

「ヒナタ！気づいたのか！」

「な、ナルト君…私…突然のことで…やられちゃって…。」

「気にするな！俺もキリヤが修羅忍だなんて、信じられなくなつたところだつたんだ！」

ヒナタと会話して一瞬集中力が途切れた俺は、キリヤの姿を見失つた！

「ナルト君！右！」

「遅いかね！火遁、鳳仙花の術！」

無数の火の玉が俺に襲い掛かる！

「ぐわっち！あっちー！くっそー！これならどうだ！多重影分身の術！」

俺は1000人に分身した。

丘の上はたちまち俺で一杯になる。

「よーっし！みんな！足元の小銭を全て回収するんだ！」

「っっっおーっ！…！」

一斉にしゃがむ俺。

小銭はどンドン一箇所に回収されていく。

「こ、これは…まずいかね…。」

キリヤが素早く瞬身を繰り返しても、俺の分身の攻撃に押され、徐々に小銭は山となっていた。

「…はっはっは！どうだ！」「」

小銭の山を俺の影分身が取り囲み、いつでも大玉螺旋丸を放てるようにスタンバイする。

「こ、これでは術を使っても同じところに出てしまつかね…。」

俺の無数の攻撃を少しずつ受けたキリヤはもうぼろぼろだ。

「よーっし！それじゃあ、うずまきナルト二千連弾、いくつてばよ！」

俺が構えた瞬間…！

どっおっ！

突如地面が盛り上がり、巨大な馬が姿を現した。

その馬はキリヤを啞え、俺たちの頭上を飛び越えて遠くに降り立つ。

「た、助かったかね…。」

「むう。もうぼろぼろではないかキリヤ。」

その馬の背から降りてきたのは、潮次団子だった。

「口寄せの術！」

団子が術を発動すると、巨大な馬が数頭姿を現した。炎を纏った馬、雷を纏った馬…。種類もいろいろだ。

「行け！」

団子の一言で、馬たちは一気に俺たちに向かってきた！

そうして戦場は大混乱に陥った。

「くそっ！またやられた！」

「螺旋丸！螺旋丸！螺旋…はあはあ。」

「一頭倒したぞーっ！」

「しかし…キリヤ。なぜあの女にこだわった。」

「ナルトをおびき出すには一番良いと思ったからだがね。九尾のチヤクラを手に出来れば、最高だがね。」

「それは今回は任務外だ。」

「でもよ…。それに、ヒナタちゃんは可愛いかね。ゲットできれば一石二鳥だがね。」

「貴様…。」

そう言っつて団子はヒナタを見る。

「ま、まあ、あの胸は俺も興味をそそられるが。」

「おっ！団子のむっつり助平！」

「ば、馬鹿野郎！」

顔を赤くする潮次団子。

俺は、それを…。

「見逃さなかつたつてばよーっ！」

全ての馬を倒し、まだ残っている影分身体を集め、俺は団子に向き直る。

構えをとる団子。

「口寄せの…！」

「ハーレムの術！」

僅かに俺の方が速かった。

全ての俺は、全裸の美女に変化する。

「ぬおっ！」

団子は目を見開き……。
ぶーっ！

鼻血を勢い良く噴出して卒倒した。

「あ、あちゃー……。これだからムツツリはいかんかね……。」
素早く団子を馬に乗せるキリヤ。

「待つってばよ！お前達には聞きたいことが山ほどある！」
しかし、キリヤは馬を走らせ始めた。

「また会うかねナルト！ヒナタちゃん！」
その一言を最後に、物凄い勢いで馬は走り出した。

速い。俺も疲労しているし、追いつくのは難しそうだ。

「くそっ！逃がしちまったってばよ……。」
悔しいが、諦めて、俺はヒナタを見た。

「な、ナルト君……。」

顔を赤くして俯くヒナタに、俺はケンカしていたことを思い出した。

「あ、あー……ヒナタ。その……こないだは言いすぎたってばよ……。」
しかし、ヒナタは目を閉じている……。

「ひ、ヒナタ……？」

俺の声に、すっと、ヒナタは瞳を開け、顔を上げ、俺を真っ直ぐに見つめた。

「助けてくれてありがとう、ナルト君。」
その顔は。

笑顔だった。

輝くような、飛び切りの笑顔。

でも。

頬は赤らんでいて。

皆に見せるような笑顔とは違う。

それよりももっと…愛おしい。

そんなヒナタに俺は…魅せられた。

「…ナルト君？」

ボーっとしているところを覗き込まれ、俺は耳まで真っ赤になって俯いてしまった。

「あ、いや、その。大丈夫、だつてばよ。」

「…そう？」

「さ、木の葉に帰るつてばよ！」

俺はわざとらしく声を張り上げ、丘を下り始めた。

…ナルト君が顔を赤くして俯く。

私の笑顔を見て、俯く。

その所作はまるで。

まるで…。

「さ、木の葉に帰るつてばよ！」

わざとらしく声をあげて走り出すナルト君の後ろをついて走りながら、私はつい微笑んでしまった。

…嬉しくなつてしまった。

「…で、逃がしてしまったのか…。」
「す、すみません、綱手様…。」
「しゃーねーじゃんかよー。それに、それに、すっげー強かったっ
てばよ。あの瞬身。」
「… 銭遁の術か。あれは木の葉でもよく分かっていない術だな。」
「瞬間移動とか、凄かったってばよ。」
「ふむ…。」

『 銭瞬身の術だけは情報があった。おそらく、木の葉滞在中にいく
つもの銭をばら撒き、実際に木の葉で戦闘をするとき有利にしよう
と考えたのだろう。』

『 え！ってことは、今にもキリヤが現れるかも…!?!? 』

『 いや、それはない。銭瞬身は、自身の半径100m以内の銭にし
か移動できない。流石に里の100m圏内に不破キリヤが近づけば、
監視班が連絡をよこすはずだ。』

『 なるほど…。』

『 で、でも、修羅忍は木の葉での戦闘を計画してるってことですね
…。』
『 そうだ。引き続き暗部と何人かの上忍に、修羅忍の探索を命じて
ある。』

…。
「どつだ、木の葉の様子は。」
闇の中。

銭盗聴の術で木の葉の様子を探っていた俺に声を掛けてくるリーダ
ー。

「心配しなくても、木の葉の連中は俺の銭盗聴の術は知らないようだがね。」

「そうか。団子の持ち帰った里の見取り図とあわせれば、木の葉の弱点は筒抜けだな。」

今回の作戦の真の目的はこれだった。

本当は修羅忍とばれることなく里を去るつもりだったが、暗部に目を付けられていたのでなかなか難しく、それならいつそ九尾を捕らえようと考えたのだが…。

「お前は戦闘能力は低い。余計な事はするな。」

「うっさいかね！ナルトのヤツ…。次は勝って見せるかね。」

「好きにしろ…。」

そう言うと、リーダーは踵を返し、去っていった。

「偉そうにシヨウウのヤツ…。」

俺は、再び木の葉の盗聴を開始した…。

第8話「戦うナルトと捕らわれヒナタ」（後書き）

大分更新が開いてしまった…。飽いてしまった方もいるでしょう。ごめんなさい。

銭盗聴の術の効果範囲は半径100km以内です。ただし、一度に盗聴できるのは一箇所の小銭のみ。キリヤのチャクラ量では印をつけられる小銭の数は255枚が限界です。

ちなみに火影室には小銭を仕掛けた訳ではありませんが、綱手が？んでいる間に草履の裏に小銭を仕掛けておきました。もちろん草履からはすぐにはずれませんが、その時綱手は自分が落としたと勘違いして財布に仕舞い、今に至ります。なので、使われてしまえば火影室の盗聴は不可能に…。

ナルト「実戦でも意外とハーレムの術は役に立つてばよ。」
ヒナタ「そ、そうだね。」

ナルト「サクラちゃんにはくだらないエロ忍術とか言われたけど…。でも裸のイケメン、だったらサクラちゃんにも効果あるかも…？よし！練習だ！まずは多重影分身の術！」

ヒナタ（こ、この状態ですでに私にはハーレムの術状態…！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1609w/>

ナルトとヒナタの恋物語

2011年11月6日00時04分発行